



リビングに面したトイレ。水回りの在り方から計画を展開した。



天板を下ろせばトイレが子上がりとなり、リビングに対するニッチとしてふるまう。



住戸全体の回遊性に、水回りも加わるような計画を目指した。

芳野の住宅 ポリバレントな水回りのふるまい

築20年が経過した、プレキャストコンクリート造住宅のリノベーション。

住宅における水回りはしばしば「ユーティリティ」と称される。そこでは生活を支えるための合理性や効率性が重視され、トイレ、浴室、キッチンそれぞれ独立した機能空間として計画されてきた。

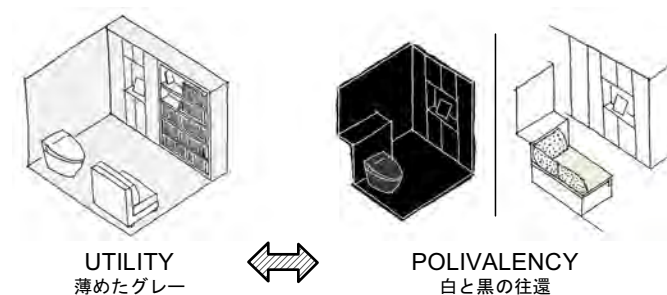
一方で水回りにはこうした機能分担だけでは捉えきれない“密かな役割”も存在する。例えばトイレで漫画を読む人もいれば、浴室で子供と絵具遊びをしたり、キッチンをスタンディングデスク代わりにすることもある。

本計画は、水回りが持つこれらの役割を引き出し、ユーティリティからポリバレントな存在へと更新する試みである。

ポリバレントという言葉は日本の現代サッカーに由来し、本計画においては、単に複数の機能を併せ持つことではなく、周囲との関係に応じて役割を変化させながら、住宅全体の振る舞いに作用するあり方を意図している。

トイレは子上がり（デン）となり、浴室は内外をつなぐ土間となり、キッチンはDIYや工作の場となる。時に水回りの象徴である便器や浴槽は姿を消し、一方で空間を閉じれば一般的なトイレや浴室としても機能する。水回りは用途を固定された機能空間ではなく、小面積でありながら住まい全体の使われ方を調整するポジションとなる。

その結果、住宅内の用途区分は緩やかに溶け合い、暮らし方に応じて空間の輪郭が更新され続ける。換言すれば、空間の流動性という現代建築のトピックスに対して、どちらかという阻害要因だった水回りが、むしろそれをアシストをする存在になり得るのではないかと考えている。



開放と閉鎖が切り変わるような機能空間のありかたを目指した。

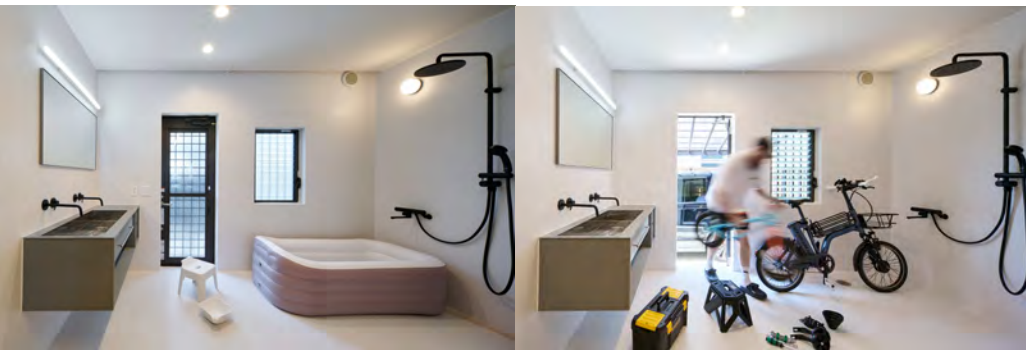


エントランスからみる。右手がトイレ、左手奥にキッチンが見える。



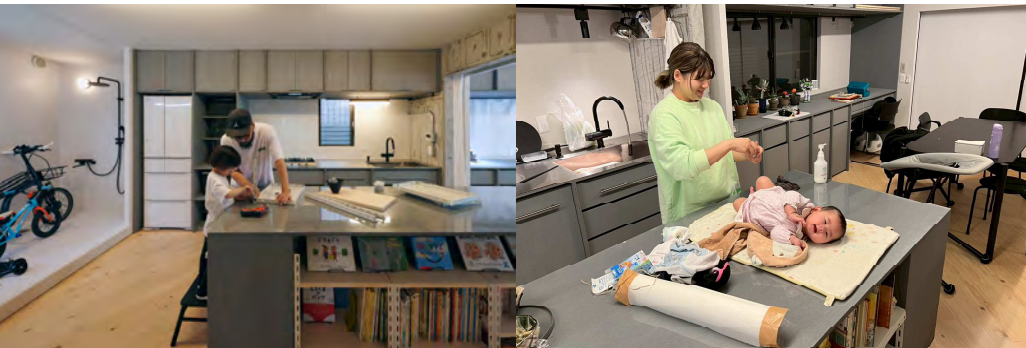
ポリバレントなトイレのふるまい

便器を覆う跳ね上げ天板と空間前後の建具の開閉により、トイレ/子上がりとオープン/クローズの四象限を作り出す。住まい手の生活にあわせ流動的に可変する。



ポリバレントなバスルームのふるまい

浴槽を空気式にする事で、浴室が土間へと姿を変える。いわば「防水された部屋」として、縁側などとは別の方向性をもった内と外の中間領域的なふるまいとなる。

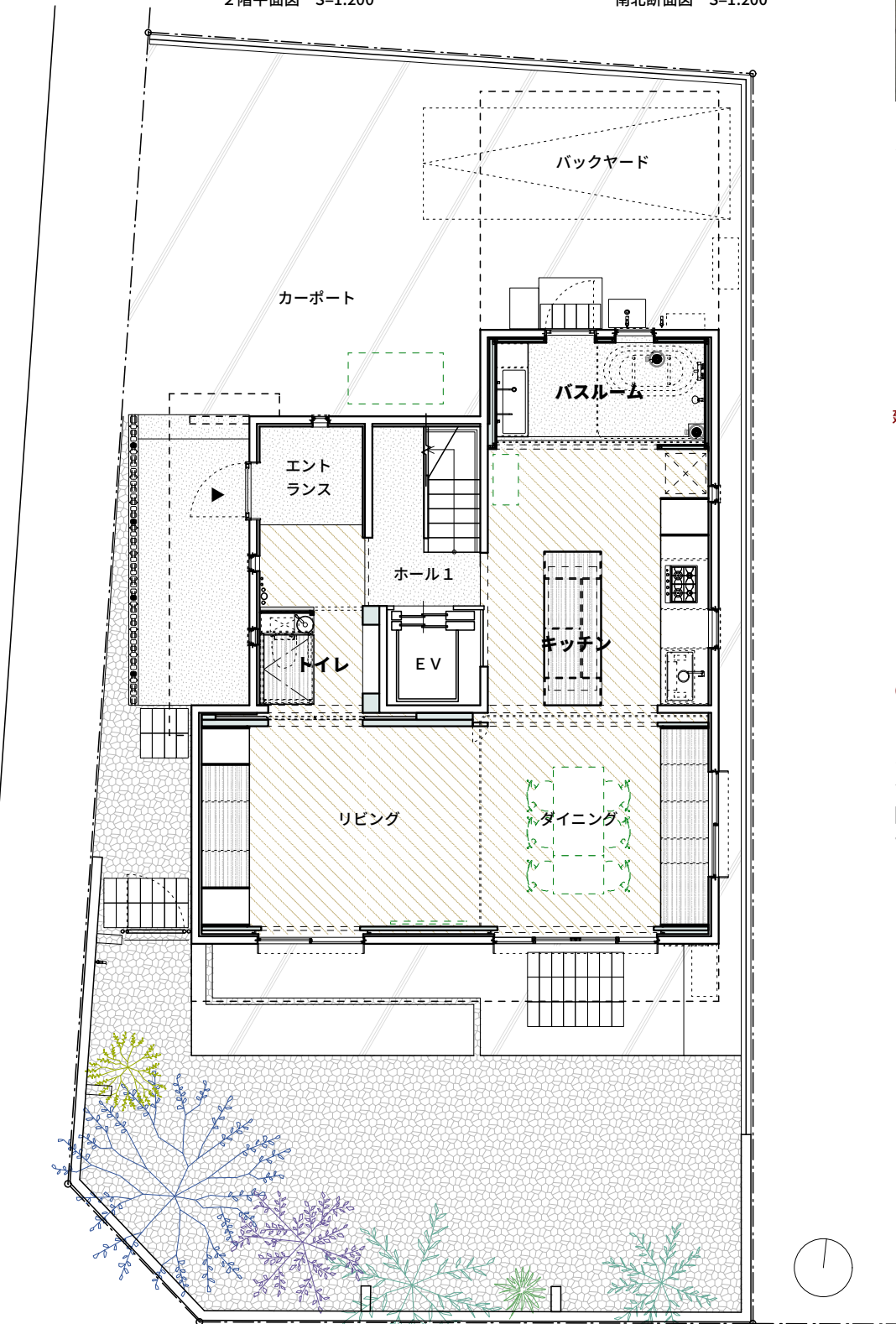
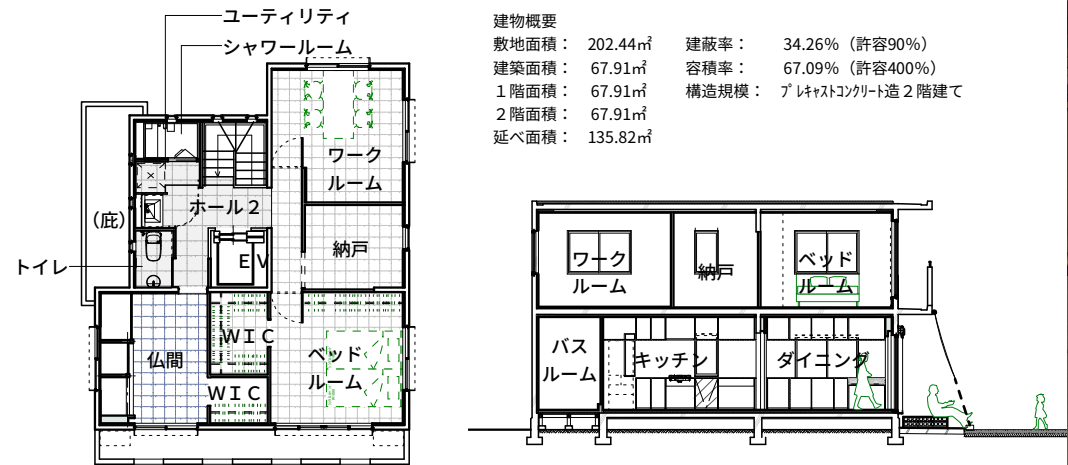


ポリバレントなキッチンのふるまい

あえてアイランドカウンターに調理機器を設けず、キッチン上部吊戸の奥行を750mmに統一する事で、キッチンの象徴性を薄め、ニュートラルな作業の場としてふるまう事を目指した。



キッチン〜バスルームをみる。

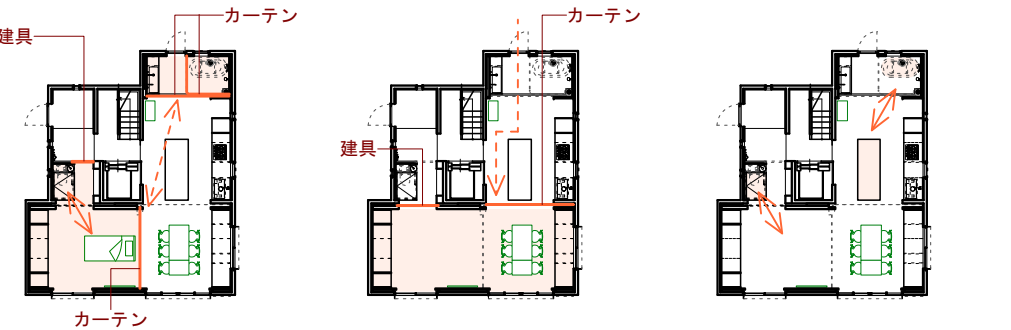


配置図兼1階平面図 S=1:100



水回りがかえる暮らしの自由度

1階はリビング、ダイニング、キッチンに同程度の面積を割り振り、カーテンや建具の開閉によって仕切り位置を変える事で様々な生活の場に応答するよう計画した。いわゆる田の字プランであるが、民家のそれと違うのは水回りがここに参画している事だと考えている。来客時はニッチのような+aの空間として、子育て期にはオープンなまま使用できるトイレや風呂場として、流動的な住まい手の要求を柔軟に受け止め得る水回りのあり方になったと思う。おそらくシニア期の住まいにとっても本計画のアプローチは有効で、水回りが暮らしに自由度を与える可能性を感じている。



CASE1：ゲストルーム

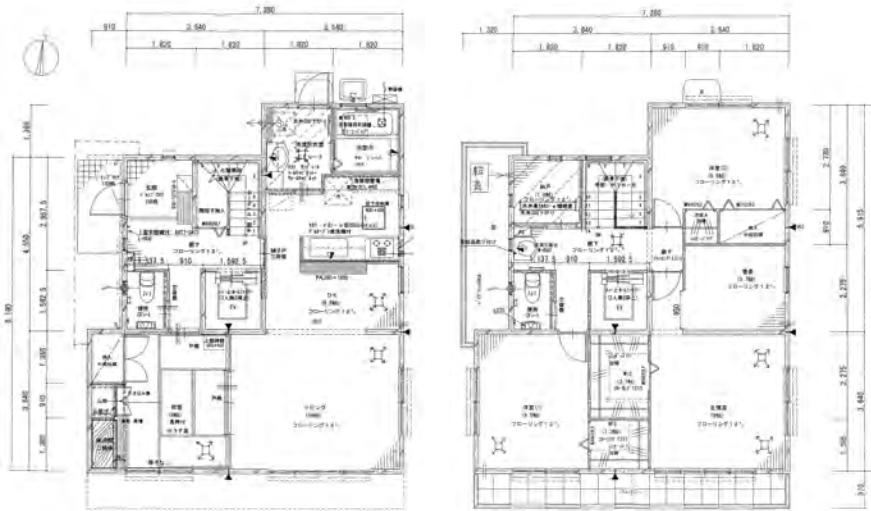
リビングを仕切り、ゲストルームとする。トイレはゲスト専用の空間として、ニッチとしても利用される。

CASE2：ホームパーティ

大勢が集まる時のレイアウト。トイレは従来のトイレとして、バスルームはエントランスとして機能する。

CASE3：オープン使い

全く間仕切をしない状態でトイレや浴槽を使用する。子育て期や介護が必要な世帯に有用なあり方。



改修前1階平面図 S=1:200

改修前2階平面図 S=1:200